

ると見る外はあるまい。<sup>⑦</sup> 假りにさう考へて置いて、然らば何時この改竄が行はれたであらうかといふに、勿論確實にこれを知ることには出来ないけれども、元史兵志站赤篇が既に驛傳と稱せずして站赤といひ、而してその序文が殆んど全く永樂大典本站赤門の序文と相等しいことから考へると、これが蘇氏の元文類を刊行した元統二年以後、而して宋濂等の元史を上つた洪武二年より以前に行はれたものであることだけは疑無いところである。

經世大典の成つたのが何時であつたかについても、こゝに一應攷究を加へて置く要がある。錢大昕はその著元史藝文志に於て、

經世大典八百八十卷 目錄十二卷 公牘一卷

纂脩通議一卷至順三年二月進云々

として、下に纂脩の總裁及びこれに關與したものの名を擧げて居り、元史新編もその藝文志に於て全くこれに従つて居る。これに據ると至順三年二月に初めてこの書が出来て進呈せらるゝに至つたものであるかの如く認められるのであるが、嚴密に言へば、これは進呈の時日を示しただけで、書の成つた時日とは關するものではない。錢大昕や魏源の記してある所は無論誤りではなく、元文類卷十七に載せた歐陽玄の「進經世大典表」にも元文類の編者が註記して「至順三年三月進」と記してある。前者に二月とあり、後者に三月とあるが、それは多分後者の誤りであるらしく、孫承澤の元朝典故編年考卷七にもこの表を載せ、その首に「至順三年纂脩經世大典成、二月朔日詞臣歐陽玄進表云」と添へてある。此の如く至順三年二月にこの書を進呈するに至つたことは疑ないが、これが編纂・成書・繕寫等については少しく立入つて攷究を加へて置きたい。